

(注)本稿は2009.7.29から8.30にかけてブログ「内外の石油情勢を読み解く」で6回に分けて連載したものです。

## OPEC と BP の石油統計を比較すれば-----

<u>目次</u>	<u>頁</u>
OPEC と BP の石油統計を比較すれば-----はじめに	1
OPEC と BP の石油統計を比較すれば-----埋蔵量	2
OPEC と BP の石油統計を比較すれば-----生産量	4
OPEC と BP の石油統計を比較すれば-----輸出量	5
(補) OPEC 加盟国の石油収入と経常収支	8

### はじめに

BP が 6 月に公表したエネルギー統計資料「BP Statistical Review of World Energy 2009」については、既に「石油篇」、「天然ガス篇」及び「石油+天然ガス篇」としてその概要をお知らせしましたが(\*1)、7月にOPEC(石油輸出国機構)から「Annual Statistical Bulletin」(ASB)がインターネットで公開されました(<http://www.opec.org/library/Annual%20Statistical%20Bulletin/ASB2008.htm>)。

ASB は OPEC 加盟国(\*2)の経済エネルギー統計を中心にとりまとめたものである。マクロ的な数値については両者の統計に大きな差は無いが、国別に比較するといくつかの差異が見られる。これは民間企業のBPと石油生産国のOPECという両者の性格の違いによるものと考えられる。

OPEC と BP の石油統計を比べて両者の違いを示すことが本稿の目的であるが、同時に OPEC 加盟国の将来の石油輸出可能量を検証することがもう一つの目的である。これまでは OPEC 総会決議としての生産枠の変更、即ち生産量の増減に焦点が当てられているが、現実には OPEC 加盟国自身の石油消費量が増えており、その結果各国の生産量から消費量を差し引いた輸出可能量が減少しつつあることが懸念される。OPEC 即ち「石油輸出国機構」とは生産量で世界の石油需給に影響力を及ぼしているわけではなく、その影響力は輸出可能量にあるはずだからである。

なお本稿は OPEC と BP の統計の誤差の理由を探るものではない。それは筆者の力の及ばないことであり、筆者が本稿で強調したいのは一つの統計だけを鵜呑みにすることの危険性である。

統計数値は得てして客観的で絶対的なものと考えがちである。しかしエネルギーという戦略的な商品の場合、公表される統計数値にはしばしば編纂者(BP の場合は同社自身、OPEC の場合はデータを提供する各加盟国)の意図が介在していることは否定できないであろう。二つの統計を比較することにより、編纂者の意図を読者自身であぶり出していただくことが本稿の本当の目的である。

(\*1) BP 資料のレポートは HP「中東と石油」の下記 URL でご覧いただけます。

[・BP エネルギー統計 2009年版：石油+天然ガス篇](#)

[・BP エネルギー統計 2009年版天然ガス篇](#)

[・BP エネルギー統計 2009年版石油篇](#)

(\*2) OPEC 加盟国について

2007年にアンゴラとエクアドルが OPEC に加盟した結果（エクアドルは再加盟）、2008年の OPEC 加盟国の数は、それまでの11カ国（アルジェリア、インドネシア、イラン、イラク、クウェイト、リビア、ナイジェリア、カタール、サウジアラビア、UAE およびベネズエラ）に加えて13カ国となった。従って以下に言及する ASB(OPEC)および BP の埋蔵量、生産量等の数値はこれら13カ国の合計値である。また過去に遡るデータについてもこの13カ国の合計値であり、必ずしもその時々の OPEC 加盟国の合計値ではない。

なおインドネシアは昨年末で OPEC を一時脱退したため、現在の OPEC 加盟国数は12カ国である。

## 1. 石油埋蔵量の比較

(表「石油埋蔵量」(<http://menadatabase.hp.infoseek.co.jp/1-D-2-93OilReserveOPECvsBP.htm>)参照)

OPEC 統計による全世界の石油埋蔵量は1兆2,951億バレルであり、これに対して BP 統計では1兆2,580億バレルとされており、両者の差は2.9% (371億バレル) とさほど大きくない。しかしこれを OPEC と非 OPEC それぞれで見ると、OPEC 統計では OPEC13カ国の埋蔵量合計は1兆274億バレルに対し、BP 統計では9,558億バレルであり、OPEC 統計の方が716億バレル多い。

一方、非 OPEC の埋蔵量合計は OPEC 統計では2,667億バレルに対し、BP 統計は3,022億バレルであり、逆に BP 統計のほうが非 OPEC 諸国の埋蔵量が多い。これを比率で見ると、OPEC 統計では全世界の埋蔵量に占める割合は、OPEC79.3%、非 OPEC20.7%であるが、BP 統計では OPEC76.0%、非 OPEC24%である。つまり OPEC は加盟国の埋蔵量シェアが全世界の5分の4を占めているとするのに対し、BP 統計では OPEC のシェアはそれより低いと見ていることになる。

上図は OPEC、BP の両統計について1980年以降の OPEC 埋蔵量のシェアをプロットしたものであるが、いずれの年も OPEC 統計の方がシェアは1～3ポイント高い。そして1986年から2005年までは両統計の OPEC シェアには殆ど差が無かったが、2006年以降、BP 統計の OPEC シェアが変化していないのに対して、OPEC 統計では世界の埋蔵量に占める OPEC のシェアが年々上昇している。そして2008年のシェア79.3%は、統計値としては過去最大となっている。

これらのことは OPEC が埋蔵量に関して自分たちの重要性を主張しているという見方もできるであろう。

OPEC 統計も BP 統計も世界の総石油埋蔵量については大きな違いはないが、OPEC と非 OPEC 産油国の埋蔵量のシェアに大きな差異がある。OPEC 統計による OPEC と非 OPEC のシェアは79.3%対20.7%であるのに対し、BP 統計ではその比率は76%対24%である。

OPEC と非 OPEC のうち主な産油国の埋蔵量を比較すると

(<http://menadatabase.hp.infoseek.co.jp/2-D-2-93OilReserveOPECvsBP2.gif> 参照)次のようなことがわかる。即ち、

- OPEC のうち中東 6 カ国(サウジアラビア、イラン、イラク、クウェイト、UAE 及びカタール)は全世界の埋蔵量のほぼ 6 割を占めている。また OPEC 統計と BP 統計に殆ど差は無い。(実際、OPEC 統計のカタール埋蔵量が BP 統計より 19 億バレル多いことを除けば、他の 5 カ国の数値は全く同じである。)
- 南米の OPEC 加盟国であるベネズエラ及びエクアドルは、いずれも OPEC 統計値が BP 統計値のほぼ 1.5 倍である。これについて OPEC 統計ではベネズエラの埋蔵量には「オリノコ・ベルト地帯の Magna Reserve Project を含む」と注記されており、同国に数千億バレルの埋蔵量があるといわれる非在来型石油オイルシェールの一部を加えたことがわかる。(エクアドルについては不明)。
- 上記以外の OPEC5 カ国 (アルジェリア、アンゴラ、インドネシア、リビア及びナイジェリア)については合計埋蔵量 (1,100 億バレル弱) は OPEC 統計と BP 統計で大きな差異は無いが、国別で見るとアンゴラの埋蔵量は BP 統計の方が 4 割以上大きく、ナイジェリア、リビアの埋蔵量は BP 統計値が OPEC 統計値より若干少ない。
- 旧ソ連邦の埋蔵量は両統計とも 1,280 億バレル前後で殆ど差が無い。
- 米国、カナダについてはいずれも BP 統計の埋蔵量が OPEC 統計よりも多い。特にカナダは OPEC 統計値が 49 億バレルに対し、BP 統計値は 286 億バレルと 6 倍の開きがある。これについて BP 統計では、「(非在来型石油オイルサンドのうち)既に開発中の油田の埋蔵量を加算」との注記が見られる。

このように OPEC 統計と BP 統計値に違いが見られる。OPEC 統計は加盟国が自己申告する数量を計上していると考えられ、一方、BP は同社の長年にわたる世界各地での探鉱実績をもとに推定した数値 (一部シェールなど他の国際石油企業との情報交換によるものも含まれるであろう) と考えられる。これらの点を考慮すると、上記の各国別の差異に共通して言えることは、OPEC 加盟国の一部が埋蔵量を多めに申告しようとする傾向が見られる。それは特にベネズエラのように欧米先進国に対抗しようとする国に顕著であり、その背景に政治的思惑があると考えれば説明がつく。

一方、民間企業である BP の場合は、投資家及び税務当局に対する説明責任として、自社の埋蔵量を公正妥当な基準に従って算出し情報開示する義務がある。BP 統計では米国、カナダ、アンゴラ、カタール等については OPEC 統計を上回る埋蔵量を計上している。このうちアンゴラ、カタールは OPEC 加盟国であるが、OPEC 統計よりもそれぞれ+40 億バレル、+19 億バレル多い。これは BP 自身を含む国際石油会社 (IOC) がこれらの国の探鉱開発に深く関与しており、石油の埋蔵状況をかなり正確に把握しているためと言えるかもしれない (但しこれは筆者の推測にすぎない)。ただ一般的に言えば数年前にシェールが自社の埋蔵量を大幅に下方修正したことに見られるように、IOC は公表する埋蔵量を厳密化する傾向にある。

サウジアラビア、クウェイト、UAE の 3 カ国は OPEC、BP の統計値が完全に一致している。これらの国では国営石油会社が探鉱開発をほぼ独占しており、IOC は一部しか関与していないが、

歴史的に IOC の強い影響を受けており、埋蔵量の算出方法に信頼性があることが両者の数値が一致する理由かもしれない。

それに反しイラン及びイラクの埋蔵量について、OPEC と BP の数値が一致しているのは、むしろ現時点では上方あるいは下方修正するだけの客観的なデータが乏しいためではないだろうか。イラクは最近油田の入札を行っており、今後 IOC を含む外国企業が探鉱開発に参入すれば埋蔵量を変更する可能性が高くなる。一方、イランの場合は欧米諸国との緊張関係という政治的な背景により、場合によってはベネズエラのように、国内埋蔵量を上方修正する可能性も否定できない。

いずれにしても産油国が公表する自国の石油埋蔵量は、その国の国力の誇示であるとともに、外交経済関係を有利に展開する最も優れた手段の一つであることだけは十分認識する必要があり、OPEC 統計と BP 統計を単純比較してその差異を説明することは困難である。むしろこじつけ的に説明するよりも、両者のビヘイビアの違いを理解することが必要なのかもしれない。

OPEC と消費国の間で産消対話が盛んに叫ばれているが、両者が同じ土俵で議論するためには埋蔵量など基礎的データを一本化することがまず先決である。その認識は両者が共有しており、例えば 2002 年に大阪で開かれた第 8 回国際エネルギー・フォーラム（いわゆる産消対話）では事務局を設けて産油国と消費国が協働してデータの一体化を図ることが合意されている。しかし本件はその後進展した気配がないまま今日に至っているのである。問題の解決は簡単ではないようである。

## 2. 石油生産量の比較

### (1)2008 年の比較

OPEC 統計による 2008 年の世界の石油生産量は 7,203 万 B/D である。このうち OPEC 加盟国 (13 カ国) の生産量は 3,309 万 B/D、その他非 OPEC 諸国は 3,894 万 B/D であり、世界の石油生産に占める割合は OPEC が 45.9%、非 OPEC が 54.1%であった。一方、BP 統計によれば同年の世界の石油生産量は 8,182 万 B/D、うち OPEC は 3,670 万 B/D、非 OPEC は 4,512 万 B/D で、それぞれの割合は OPEC44.9%、非 OPEC55.1%であった。

両者を比較して最も大きく異なるのは BP 統計の生産量が OPEC 統計のそれに比べ 979 万 B/D(13.6%)も多いことである。BP 統計の脚注にはオイルサンド、オイルシェール、NGL(天然ガス液)の生産量が含まれていると記されているが、原油とそれらの内訳は示されておらず、また OPEC 統計にはそのような脚注がなく、差異の理由は不明である。ただ両者の差異 979 万 B/D の内訳は、OPEC 諸国が 361 万 B/D(10.9%)、非 OPEC 諸国は 618 万 B/D (15.9%) である。

このことから BP は OPEC 加盟国の生産量を少なめに、そして非 OPEC の生産量を多めに計算している（逆に言えば OPEC は加盟国の生産量を多めに、非加盟国の生産量を少なめに計算している）という推論が成り立つ。冒頭にも触れたとおり OPEC のシェアが OPEC 統計の 45.9%に対し BP 統計は 44.9%と、両者の間に 1%の差があることがそれを示している。

OPEC 統計に示された加盟国別生産量について OPEC 統計と BP 統計を比べると、特に差異が目立つのは以下のような国である。

(詳細は <http://menadatabase.hp.infoseek.co.jp/1-D-2-102OilProduction2008OPECvsBP.htm> 参照)

- ・ 量的な面ではサウジアラビアの差異が 165 万 B/D (OPEC 統計 920 万 B/D、BP 統計 1,085 万 B/D、以下同じ) と最も大きく、次いでアルジェリア 64 万 B/D(136 万 B/D、199 万 B/D)、カタール (84 万 B/D、138 万 B/D)、UAE (257 万 B/D、298 万 B/D) など大半の加盟国は BP 統計の数値が高い。これに対してベネズエラは OPEC 統計の生産量 312 万 B/D に対して BP 統計は 257 万 B/D であり OPEC 統計の方が 55 万 B/D も多い特異な数値を示している。
- ・ 両統計の乖離を比率で見ると、最も乖離が大きいのはカタールの 63.5%であり、ついでアルジェリア 47%、サウジアラビア 17.9%、ベネズエラ 17.7%などである。

BP 統計の各国生産量が概して OPEC 統計より多いのは、BP 統計にはオイルサンド、オイルシェール、NGL が含まれているためと考えられるが、ベネズエラがその逆の傾向を示していることは説明がつかない。埋蔵量の比較 (前回参照) でも述べた通り、ここでも OPEC (各国) と BP それぞれに統計を集計するに際して固有の (しかもかなり異なった) 判断が働いているものと考えられる。

## (2)1988～2008 年の比較

次に両統計について全生産量と其中での OPEC のシェアについて 1988 年から 2008 年までの推移を見る。2008 年の生産量は OPEC 統計 7,203 万 B/D に対し、BP 統計は 8,182 万 B/D であった (上述)。1988 年は OPEC 統計 5,691 万 B/D、BP 統計 6,315 万 B/D で、やはり BP 統計の方が 624 万 B/D 多い。その後生産量は一貫して上昇しており、BP 統計では 1997 年に 7,000 万 B/D、2004 年には 8,000 万 B/D を突破している。一方、OPEC 統計では 1995 年に 6,000 万 B/D、また 2004 年には 7,000 万 B/D を突破しており、BP 統計が OPEC 統計を上回る状況は過去 20 年間変わっていない。ただその差異はここ数年拡大しており、2002 年以降は 1,000 万 B/D 前後まで広がっている。

(グラフ <http://menadatabase.hp.infoseek.co.jp/2-D-2-102aOilProduction1988.gif> 参照)

この間の生産量に占める OPEC のシェアの推移を示したものが上図である (拡大図は <http://menadatabase.hp.infoseek.co.jp/2-D-2-102bOilProductionOpec.gif> 参照)。1998 年には OPEC のシェアは OPEC 統計、BP 統計とも 34%台で大きな差はなかった。実はこの時期は OPEC のシェアがオイルショック以降最も低かった時期であり、その後図に示すとおり OPEC のシェアは上昇し、1992 年以降は 40%を下回ったことはなく、しかも近年は OPEC 統計、BP 統計とも 45%以上の水準にある。

但し注目すべきは 2003 年まで両統計による OPEC シェアの差は殆どなかったが、2004 年以降はシェアの差が 1%程度に広がった状態が固定化していることである。シェア 1%は 70～80 万 B/D に相当し決して小さな数値ではなく、OPEC は埋蔵量と同様 (前回参照) 石油生産においても自らの存在感をアピールしているものと言えよう。

## 3. OPEC 諸国の原油輸出量

### (1)世界全体の原油輸出量

2008 年の全世界の原油輸出量は OPEC 統計によれば 4,011 万 B/D であり、BP 統計では 5,463 万 B/D とされている。両統計の差は 1,452 万 B/D に達する。OPEC 統計では OPEC 加盟国を含め多くの国別輸出量が示されているが、BP 統計ではその数は極めて少なく、また地域別生産量についても地域の定義が両統計で異なるため、差異を分析することは難しい。

全世界の輸出量について両者の差異を過去 20 年間で比較すると（詳細は「石油輸出量の推移（1998～2008 年）」<http://menadatabase.hp.infoseek.co.jp/2-D-2-99dOilExportOpecvsBP1.gif> 参照）、1998 年の全世界の輸出量は OPEC 統計 3,015 万 B/D、BP 統計 3,232 万 B/D であり、その差異は 218 万 B/D であった。輸出量はその後毎年増加しているが、これは中国、インドなど新興工業国を含む世界経済が急速に拡大した結果、石油の貿易量も増えたためと考えられる。但し OPEC・BP 両統計の差異は少しずつ広がり、1997 年の輸出量は OPEC 統計 3,477 万 B/D に対し、BP 統計は 4,089 万 B/D、差異は 6 百万 B/D を超えている。

2000 年以降は両統計に大きな違いが見られる。即ち BP 統計では 2008 年を除き毎年常に前年を上回る伸びを示しているが、OPEC 統計では 2000 年から 2002 年までの 2 年間は輸出量が前年を下回っており、その後持ち直したものの 2004 年以降の輸出量は 4,000 万 B/D 台で横ばいの状況である。この結果、OPEC 統計と BP 統計の輸出量の差は年々大きくなっており、2008 年にはその差は 1,452 万 B/D、36%に達している。

## (2)OPEC 加盟国の原油輸出量

（BP 統計は OPEC 加盟国の国別輸出量が示されていないため、以下の数値は全て OPEC 統計によるものである。）

2008 年の世界の原油輸出量 4,011 万 B/D のうち OPEC14 カ国は 2,419 万 B/D であり、全体の 60%を占めている。OPEC の中で最も多いのはサウジアラビアの 732 万 B/D で 2 位のイラン(244 万 B/D)の 3 倍の輸出量を誇っている。この 2 カ国に続くのが UAE (233 万 B/D) 及びナイジェリア(210 万 B/D)であり、これら 4 カ国が OPEC 加盟国で輸出量 2 百万 B/D を超えており、残る 9 カ国の合計輸出量は 1 千万 B/D である（図「原油輸出量（2008 年）」<http://menadatabase.hp.infoseek.co.jp/2-D-2-99aOilExportbyOpec200.gif> 参照）。

図 <http://menadatabase.hp.infoseek.co.jp/2-D-2-99bOilExportOpecvsNon.gif> は、1988 年から 2008 年までの世界の原油輸出量と OPEC のシェアを示したものである。棒グラフの青色部分が OPEC 加盟国の輸出量、緋色部分が非 OPEC 産油国の輸出量である。そして黄色の折れ線グラフは OPEC のシェアを示している（輸出量は左軸で単位は万 B/D、シェアは右軸でパーセント表示）。参考までに OPEC の生産シェアを緑色の折れ線で示した（前項「石油生産量の比較」に示したものと同一）。

OPEC 加盟国の輸出をまず量の面で見ると、1988 年に 2,436 万 B/D であった輸出量は 1993 年に 3 千万 B/D を突破、2000 年には 3,900 万 B/D 弱に達した。その後若干落ち込んだものの、2005 年以降の輸出量は 4 千万 B/D 台を維持している（表「OPEC 各国の原油輸出量」<http://menadatabase.hp.infoseek.co.jp/1-D-2-99OpecOilExport1988-2008.htm> 参照）。これをシェアの面で見ると、1988 年の世界の OPEC 加盟国の輸出量は全体の過半を超す 55%であった。その後この割合は 1991 年に 63%のピークに達した後、徐々に低下して 2002 年には 1988 年当時より低い 53%に逆戻りした。しかしそれ以後 OPEC のシェアは再び上昇しており 2008 年には 60%に達している。なお OPEC の生産シェアは 1988 年には 34%であったが 1991 年には 39%、2005 年には 45%を越え、2008 年には 46%に達している。ここ数年 OPEC の生産シェアは輸出シェアと同様、徐々に高まっている。

## (3)生産シェアか輸出シェアか

世界の石油供給問題が提起され、そこでの OPEC の位置づけが議論されるときに最初に取り上

げられるのは生産量である。OPEC 自身も総会における生産割り当て数量(かつては **Production Quota** と呼ばれ、最近では **Production Allocation** と言われている)という形で生産目標を示している。

しかし生産シェアについてのみ議論することは問題を曖昧にする恐れがある。生産シェアだけで言うならば、世界 1 位と 2 位はサウジアラビアとロシアであるが、実は米国 3 位、中国 5 位である(4 位はイラン)。言うまでもなく米国及び中国は世界 1 位と 2 位の石油消費国であり、石油の純輸入国である(「BP エネルギー統計 2009 年版解説シリーズ：石油篇」[http://www.k3.dion.ne.jp/~maedat/B13BP2009\\_oil .pdf](http://www.k3.dion.ne.jp/~maedat/B13BP2009_oil.pdf) 参照)。また昨年まで OPEC の加盟国であったインドネシアの原油生産量は 86 万 B/D (OPEC 統計。但し BP 統計では 100 万 B/D) で、内輸出量は 29 万 B/D とされている。しかし同じ OPEC 統計によれば同国は 26 万 B/D の原油を輸入しており、同国の純輸出量は 3 万 B/D に過ぎない(なお同国はガソリンなど石油製品も大量に輸入しており、石油に関しては 2004 年頃からすでに輸出国から輸入国に転落している)。

このように生産国によっても状況が異なるため、世界の石油の供給に関して生産量の多寡のみで論じることは必ずしも妥当とは言えない。そもそも OPEC は「石油輸出国機構」であり、文字通り加盟国の輸出力をベースとしたカルテルなのである。従って世界の石油貿易に占める輸出のシェアこそが真に消費国に対抗できる力の源泉と言える。その意味で OPEC はその生産シェア (OPEC 統計：45.9%、BP 統計 44.9%、前回参照) よりも輸出シェア(60%、OPEC 統計)がもっと注目されて良いのではないだろうか。

#### (4)OPEC とその加盟国の輸出比率

図 「 OPEC 各 国 の 輸 出 比 率 ( 1988 ～ 2008 年 ) 」  
<http://menadatabase.hp.infoseek.co.jp/2-D-2-99cOilExportShareby-C.gif> は 1988 年から 2008 年までの OPEC とその加盟国の生産量に占める輸出比率の推移である。

OPEC13 カ国全体の輸出比率は 1989 年以降コンスタントに 70%台を維持しており、その比率が最も高かったのは 2007 年の 76.3%であり、昨年も 73.1%を記録している。つまり OPEC 全体としては過去 20 年近く生産量の 7 割以上を輸出に回してきたことがわかる。加盟国の中にはイラクのように 90 年代のサダムフセイン政権時代に禁輸制裁を受けて輸出比率が 10%前後にまで落ち込んだ国もあるが、OPEC 全体として高い輸出比率を維持したのは、OPEC 最大の輸出国サウジアラビアによるところが大きいと言える。サウジアラビアは 1980 年代後半には自ら率先して生産を削減しており、輸出比率も 60~70%台に低迷していたが、90 年代には同国は輸出比率をあげイラクの輸出の減少をカバーし、現在までは 80%近い輸出比率を続けているのである。

これに対して UAE は 1990 年前後にはほぼ全量を輸出していたが現在では輸出比率は 90%になっている。さらにイランの場合は 90 年代を通じて 70%強であった輸出比率がここ数年大幅に低下し、2008 年には 60.1%となっている。同国の輸出量そのものは最も多い 1996 年で 263 万 B/D、2008 年は 244 万 B/D でさほど大きな減少は見られず、輸出比率の落ち込みは石油の増産が国内消費に食われていることを示している。

このような点を考慮すると、OPEC が現在の輸出シェア 70%を維持するか、あるいは今後シェアを伸ばすかどうかは予断を許さない。加盟各国の国内需要は今後当然増加するであろうし、その反動として輸出余力が無くなり、極端な場合インドネシアのように輸入国に転落することも考えられる。輸出シェアを維持するためには OPEC 各国が探鉱開発投資を促進して生産量を増やさ

なければならないが、探鉱投資の拡大は石油価格次第と言えよう。

### **(補) OPEC 加盟国の石油収入と経常収支**

本シリーズの最後に OPEC 加盟国の石油収入と経常収支を取り上げます。これらは OPEC 統計に示されたものであり、BP 統計との比較を目的とした本シリーズとは色合いが違いますが、ここ数年で暴騰した原油価格が、OPEC 加盟国の石油収入と経常収支を如何に大きく変動させたかを理解していただくためのものです。なお、石油価格については、図表「原油価格の推移(1976～2008年)」(<http://menadatabase.hp.infoseek.co.jp/2D-2-97SpotCrudePrices.gif>)及び BP エネルギー統計 2009 年版解説シリーズ：石油篇(5)原油価格」([http://www.k3.dion.ne.jp/~maedat/B13BP2009\\_oil\\_.pdf](http://www.k3.dion.ne.jp/~maedat/B13BP2009_oil_.pdf))をご参照ください。

#### **(1)石油収入（原油輸出金額）**

OPEC 加盟国(13 カ国)の 2008 年の石油収入合計額は史上初めて 1 兆ドルを超えた。前年比 2,500 億ドル、35%の大幅な増加であった。これは WTI 原油価格が同年 7 月に 147 ドル(1 バレル当り)の最高値を記録し、その後年末には 30 ドル台にまで急落したものの、年間平均価格が 100 ドル強であったことが最も大きな要因である。因みに OPEC 原油の年間平均バスケット価格も 2008 年は 94.45 ドルであり、前年の 69.08 ドルに比べ 37%アップしており、上記石油収入の増加は価格にスライドしたものであることがわかる。

OPEC の中で最大の石油収入を誇っているのはサウジアラビアであり、同国の 2008 年の石油収入は 2,830 億ドルで OPEC 全体の 3 割弱を占めている。サウジアラビアに次いで二番目に石油収入が多かったのは UAE (1,030 億ドル) で、OPEC の中で石油収入 1 千億ドルを超えたのはこの 2 カ国である。3 位以下はイラン 890 億ドル、クウェイト 840 億ドル、ベネズエラ 780 億ドル、ナイジェリア 750 億ドル、アンゴラ 640 億ドル、イラク 580 億ドル、リビア 550 億ドルと続き、OPEC13 カ国の中で石油収入が最も小さかったのはエクアドル (120 億ドル) である。サウジアラビアの石油収入は OPEC 下位グループ 7 ヶ国 (アンゴラ、イラク、リビア、アルジェリア、カタール、インドネシア及びエクアドル) の合計額 (2,950 億ドル) に匹敵するものである。

上図は 1988～2008 年の石油収入の推移を見たものである(拡大図は <http://menadatabase.hp.infoseek.co.jp/2-E-2-90OpecValueOfOilExpor.gif> 参照)。1990 年代は石油価格が低迷したため、OPEC 加盟国の石油収入は年間 1 千億ドル台を低迷していたが、2000 年に 2 千億ドル台を突破し、さらに 2004 年以降は急激に膨らんだことがわかる。2004 年に 3,800 億ドルであったものが、2005 年 5,600 億ドル、2006 年 6,600 億ドル、2007 年 7,500 億ドルと急上昇し、2008 年には遂に 1 兆ドルを突破している。その間の OPEC バスケット価格は、36.05 ドル(04年)→50.64 ドル(05年)→61.08 ドル(06年)→69.08 ドル(07年)→94.45 ドル(08年)となっており、石油収入は石油価格と見事に比例しているのである。

#### **(2)経常収支**

OPEC 加盟国の多くは歳入の殆どを石油収入に頼っており、従って経常収支は石油価格に大きく左右される。これは昨年のように石油価格が史上まれに見る高水準を維持した場合、大きなプラス要因となる。2008 年は OPEC 加盟国の全てが黒字を計上しており、13 カ国の経常黒字合計額は 4,700 億ドルに達している。黒字幅が最も大きかったのはサウジアラビアの 1,420 億ドルである。同国だけで全体の 3 割を占めており、また 2 位のクウェイトの 2 倍以上の黒字額であった。サウジアラビアに続くクウェイトの黒字額は 640 億ドル、以下ベネズエラ(440 億ドル)、UAE(430 億ドル)、アルジェリア(371 億ドル)、リビア(365 億ドル)、カタール(322 億ドル)と続いている。

上記(1)の石油収入の順位と比べアルジェリア、カタールの順位が高くなっているのは、両国には石油以外の天然ガスの収入があるためである。またイランやナイジェリアは石油収入に比べ経



常収支の順位が低く、一方 UAE 及びクウェイトは逆に経常収支の順位が高い。これは前者の国々は人口が多いためそれに比例して経常支出も大きく、これに対して人口の少ない後者の国々は支出がすくないことが理由である。

経常収支の経年変化を見ると（詳細は図「OPEC13 カ国の経常収支（1988～2008 年）」<http://menadatabase.hp.infoseek.co.jp/2-B-3-90OpecCurrentAccountB.gif> 参照）、1990 年代は OPEC 加盟国の多くが経常収支は赤字であった。特に湾岸戦争が勃発した 1991 年は、クウェイトを始めサウジアラビア、イランなどアラビア(ペルシャ)湾沿岸諸国では大幅な赤字を余儀なくされている。また 1998 年には原油価格が 10 ドル台前半まで落ち込んだため、このときは UAE とインドネシアを除く全ての加盟国が経常赤字を記録している。しかし 2002 年以降、各国の経常収支は急速に改善し、同年の OPEC13 カ国の経常黒字合計額 440 億ドルは翌年には 850 億ドルに倍増、その後も 2004 年 1,330 億ドル、2005 年 2,630 億ドル、2006 年 3,360 億ドルと驚異的な伸びを示し、2002 年から 2006 年までのわずか 5 年間で経常黒字幅は 8 倍近くになったのである。そして上述したとおり昨年は 4,700 億ドルに達し、2002 年当時の 10 倍以上になっている。

(完)

(これまでの内容)

本稿に関するコメント、ご意見をお聞かせください。

前田 高行 〒183-0027 東京都府中市本町 2-31-13-601  
Tel/Fax; 042-360-1284, 携帯; 090-9157-3642  
E-mail; maedat@r6.dion.ne.jp